

高知県の IPM 技術を導入している施設栽培 野菜類で問題となっているアザミウマ類と カスミカメムシ類

高知県農業技術センター
 なかいし 中石 かずひで 一英・近森 ちかもり ちさこ*・戸梶 かなこ 加奈子**・
 しももと 下元 みつき 満喜***・やました いずみ 山下 泉

はじめに

高知県は、環境保全型農業推進基本方針を 1994 年に策定し、全国的にも早い時期から環境保全型農業の推進に取り組んできた(杉本, 2008; 下元, 2011)。その一環として、天敵の利用を中心とした IPM 技術が 1997 年から導入され、2018 年には、天敵導入面積率が施設栽培のナス類では 99%、ピーマン類では 96%、キュウリでは 36%に達している(図-1)。さらに、施設栽培のコンキツや花き類でも天敵を利用した IPM 技術の導入が進んでいる。IPM 技術のメリットとして、化学合成農薬の削減があげられる。本県では、IPM 技術が普及したことにより、化学合成殺虫剤の使用量が削減され(中石ら, 2018)、これまで問題とならなかった害虫が発生し、その被害が新たな問題となっている。

そこで、IPM 技術を導入している施設栽培野菜類で問題となっているアザミウマ類 3 種とカスミカメムシ類 2 種について、発生経緯や被害、さらに防除対策等について紹介する。

I 問題となっているアザミウマ類 3 種

1 モトジロアザミウマ

Echinothrips americanus Morgan

(1) 発生経緯

2003 年に施設栽培ミョウガで発生と被害を確認して以来(高知県病虫害防除所, 2004)、施設栽培のピーマン、

Thrips and Plant Bugs Occurring in Greenhouse Vegetables Using IPM Program in Kochi Prefecture. By Kazuhide NAKAISHI, Chisako CHIKAMORI, Kanako TOKAJI, Mitsuki SHIMOMOTO and Izumi YAMASHITA

(キーワード: IPM, モトジロアザミウマ, クリバネアザミウマ, チャノキイロアザミウマ, コミドリチビトビカスミカメ, ミナミチビトビカスミカメ)

*現所属: 高知県農業振興部農産物マーケティング戦略課

**現所属: 高知県中央西農業振興センター高知農業改良普及所

***現所属: 高知県農業振興部環境農業推進課

シシトウガラシ、サヤインゲン、シソで発生面積が拡大し、特にピーマン、シシトウガラシ、ミョウガで、その被害が問題となっている。なお、伊藤・大野(2003)の報告では、キュウリ、メロン、ナス、トマト等にも寄生し、被害が確認されている。

(2) 形態

成虫は体色が暗褐色で、頭部と胸部の節間が赤みを帯び、前翅の基部および中央部が灰白色で、体長は雌が約 1.6 mm、雄が約 1.3 mm である(図-2)。幼虫は黄白色でやや細長く、複眼が赤い。また、体全体が刺毛に覆われている(図-3)。蛹は胸部から腹部にかけてやや膨らんでおり、体全体に刺毛がある。特に、成虫の前翅基部は白いラインが入ったように見え、形態的な特徴となっている。

(3) 被害

主に葉に寄生し、加害された葉はかすり状となり(図-4)、ハダニによる被害に似る。密度が上昇すると褐変し、ミョウガでは葉が枯れ上がり、ピーマン類では落葉する。ミョウガでは成長点付近に多く寄生し、新たな葉の展開とともに上位葉に広がっていく。ピーマン類では、下位葉から発生し、寄生密度が上昇すると上位葉に広がっていく。

(4) 防除対策

天敵では、クロヒョウタンカスミカメの防除効果が高い。スワルスキーカブリダニ、タバコカスミカメも本種を捕食するが、捕食量は少なく防除効果は期待できない。殺虫剤では、当センターによる感受性検定の結果から、クロルフェナピル水和剤、スピノサド水和剤、エマメクチン安息香酸塩乳剤、ジノテフラン水溶剤の効果が高く、やや劣るが、シアントラニリプロール水和剤、プロピレングリコールモノ脂肪酸エステル乳剤、ポーベリア・バシアーナ乳剤も効果が認められている。